

日本の文化が培ってきた「織・染・繡・絞・拵」の染織五芸の向上を目指し
絹の芸術を極める名匠・名家の上作をご覧ください

第68回 上品會 (じょうぼんかい)

■会 期：2月10日(月)～12日(水)

■会 場：京都高島屋7階 グランドホール (京都市下京区)

高島屋では、1月から6月までの半年間、各店にて「第68回上品會」を順次開催致します。

2月10日(月)から12日(水)までの3日間は、京都店7階グランドホールにて開催致します。

上品會は、日本の文化が培ってきた「織・染・繡・絞・拵」の染織五芸の向上を目指し、絹の芸術を極める名匠・名家の上作をご覧ください。昭和11年に誕生して以来、堅持しています。「翻古為新(古きを翻して新しきを為す)」の精神のもと、上品會同人の卓越した技術により創り出された作品を、毎年厳しい審査を経て発表しております。

■第68回上品會入選品 (特徴商品の一例)

I. 特別企画品；「きもので繋がる世界の輪」

東京に注目が集まる今年、きものの独特な美しさを改めて細やかに表現。日本の都市と姉妹・友好関係を結ぶ五大陸の都市それぞれにゆかりのある花を意匠に加え、同人各社の卓越した染織技術を駆使して仕上げました。



丸ぼかしにブラジルの国花カトレアをデザイン。裾には両市がともに海運で栄えた都市であることから、海にちなむ柄を割付文様で表現しました。漣標、船のロープ、艫、青海波。洋花と和の文様のマリアージュです。

← 訪問着「優美な貴婦人」(大羊居) 1,518,000円(税込)



姉妹都市である京都とアメリカ・ボストンを題材に制作しました。背景にはアメリカの花「バラ」を大きく描き、華文に見立てた馬車や御所車の車輪にそれぞれの都市の花を組み合わせ、淡い色調でエレガントな趣に染めあげています。

訪問着「花洛彩映」(千切屋) 1,628,000円(税込) →



東京都と姉妹都市のカイロを題材にしています。エジプトの国花スイレンを中心に、古代エジプトで作られたコアガラスと東京の伝統工芸の江戸切子を組み合わせて構成しました。

夏袋帯「ナイルの睡蓮」

(龍村) 968,000 円 (税込)



名古屋市と姉妹都市のトリノ。日本で様々な装飾に用いられる唐花とイタリアのガラス装飾から着想し、地球儀に見立てた円形の中に意匠化しました。

袋帯「花の輪舞」

(岩田) 968,000 円 (税込)



オーストラリアの国花ゴールデンワトルのリースと、横浜市の花のバラをモチーフに、それぞれを黄色とブルーでまとめました。バラはオーストラリアの国旗にある南十字星の配置に構成しています。

袋帯「麗花有好」

(川島)858,000 円 (税込)

Ⅱ. アイテム特別企画品 ; 「上品會のなごや帯」

いっそうの季節感と遊び心を取り入れて上品會同人の意匠力で表現。贅沢なおしゃれを楽しめる作品を創りあげました。



縁起の良い動物とされる兎を、雪野原に続く足跡で表現しました。兎は月の使いともいわれることから「ツキを呼ぶ」とされ、長い耳は「福を集める」といわれています。そのいわれを前柄にも表した楽しいなごや帯です。

← 織なごや帯「うさぎの足あと」

(龍村) 385,000 円 (税込)

青空の下、風にたなびく鯉のぼりをリボンで表しました。澄んだ色合いの友禅と風をイメージしたぼかしによって、全体に爽やかさと柔らかい雰囲気が醸し出されています。

染なごや帯「端午の節句」(矢代仁) 308,000 円 (税込) →



Ⅲ. 同人リコメンド品

東西の名匠8家より、同人の持つ技術の極みに挑戦した逸品12点を提案。本年は、呉服の象徴的存在である振袖にスポットを当てご提案致します。



矢代仁所蔵の総縫取御召「古代支那香袋の図」より取材し、新たに手織りにて振袖として製織しました。経糸本数が原作品より三割ほど多いことにより、織細に柄が表現され、よりしなやかな風合いに織りあがりました。

← 振袖模様「香宴清雅」

(矢代仁) 5,280,000 円 (税込)



束ねた熨斗が腰中で上下に広がるように描き、ポイントには様々な表情の橘を配して、よりめでたさを高めています。熨斗の中の模様は緻密なぼかしを加えた糸目友禅で、また、橘は金色を中心とした豪華な刺しゅうで仕上げました。

振袖文様「撰家瑞風文」(千總) 10,780,000 円 (税込) →



江戸期の小袖に見られる豪華な趣を、帯全体に配して意匠化しています。結城紬地に友禅や金彩加工、さらに刺しゅうをふんだんに加えて仕上げました。刺しゅうは、一人の職人が約三ヶ月を要したものです。

← 袋帯「爽日薫風」(岩田) 4,378,000 円 (税込)

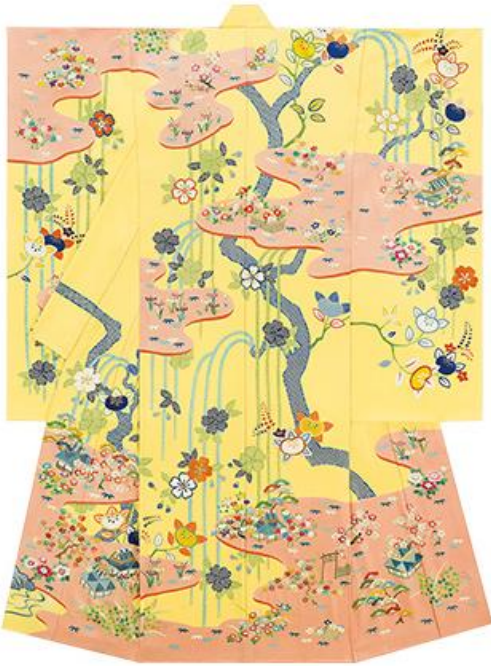
悠久の浪漫あふれるシルクロードをコンセプトに制作しました。砂丘とそこに広がる満天の星空という趣向の意匠に、シルクロードにまつわる様々な至宝。黒漆糸や角度によって色合いが変化してみえる素材を使い織りあげました。

袋帯「シルクロード宝彩」(川島) 3,850,000 円 (税込) →



IV. その他入選作品

「翻古為新(ほんこいしん) (古きを翻して新しきを為す)」の精神に則り、染織の技術と意匠に新風を吹き込む作品を厳選いたしました。



茶屋辻模様に枝垂れ桜と橘を合わせて、大胆な構図で描きました。糊四田という技法で表した木がアクセントになっています。江戸小袖のような古典の趣を持ちながらも、モダンな彩りでかわいらしくまとめました。

← 振袖模様「離宮盛彩」(大羊居) 4,378,000 円 (税込)

エ霞と幔幕を組み合わせ、幔幕の中には大王松を糸目友禅と金泥加工で伸びやかに描きました。エ霞には金箔の発色を明るくするための友禅加工を先に施し、金箔を市松状に加工することで格調高い作品に仕上げています。



黒裾模様「賀宴荘厳」(矢代仁) 1,320,000 円 (税込) →



文人画の画題の一つである五清をデザインしました。五清とは、梅・竹・芭蕉・蘭・石の五つの清いものので、円取り、横段ともに五清のモチーフで構成。円取りは力強い配色で、横段の方は柔らかい色合いで表現し、ポイントを強調しました。

← 色裾模様「五清優婉」(千總) 2,310,000 円 (税込)

二代 上野為二氏が、京都・美山の風景を題材に、牛首紬地に細かな糸目友禅と藍濃淡で描いた作品です。背より後ろ身頃の濃い藍色の部分には、ろうせき・蟬伏せで若狭路の里山を表現しました。



訪問着「美山逍遥」(千切屋) 1,848,000 円 (税込) →



上下に几帳を描き、ポイントには貝桶や御所車をあしらった檜扇を配しました。模様全体を緻密な糸目友禅で染めあげ、細やかなぼかしを加えながら格調高く仕上げています。

← 訪問着「節会の舞」(千總) 3,080,000 円 (税込)

緯糸縞を一定の間隔でずらして波文様を細かく地機で織り表しています。緯糸を滑らかな曲線状に細やかに織りあげることができるのは、熟達した技ならではのものです。

本場結城紬「時を操る」(秋場) 1,738,000 円 (税込) →



手織り錦地に二丁の本金箔を用いて制作しています。葡萄唐草とアラビア文様を融合させた意匠が鳩羽色の地色と相まって、モダンな趣に織りあがりました。

← 袋帯「シルクロード」(岩田) 1,078,000 円 (税込)

川島織物文化館所蔵の大正期の丸帯を題材に、森林の景色を現代感覚の華やかな趣に織りあげました。森の中にキツネ・ウサギ・リス・小鳥など小さな動物たちが見え隠れする遊び心のある意匠です。

袋帯「森の歌」(川島) 968,000 円 (税込) →



■第 68 回上品會の作品構成

- 特別企画品「もので繋がる世界の輪」 (全 7 点：きもの 4 点・帯 3 点)
- 特定アイテム企画品「上品會のなごや帯」 (全 1 1 点：帯 1 1 点)
- バイヤー推奨品 (全 9 点：きもの 2 点、帯 7 点)
- 同人リコメンド品 (全 1 3 点：きもの 8 点、帯 5 点)
- その他入選作品 (全 1 8 7 点：きもの 1 3 2 点、帯 5 5 点)
- 合計 (全 2 2 7 点：きもの 1 4 6 点、帯 8 1 点)

■上品會とは

上品會は、1936（昭和 11）年に千總（友禪）、矢代仁（織）、龍村（帯）の三名家が出品したことに始まり、現在まで続いている催事です。太平洋戦争で一時中断したのち、昭和 28 年に再開し、現在は、日本染織をリードする同人 8 社の渾身の作品が一堂に揃います。

発起人の初代・龍村平藏氏が提唱した「翻古為新（ほんこいしん）」つまり、古きを翻（ひるがえ）してあたらしきを為すという主旨のもと、染織五芸といわれる〈織・染・繡・絞・拵〉の技術向上を目的として連綿と続いています。68 回となる本年も、流行にとらわれることなく伝統技芸の精髓を自由奔放に表現した逸品を展覧致します。

現在の同人 8 社—秋場（紬織）、岩田（帯地）、川島織物（帯地）、大羊居（東京染）、龍村美術織物（帯地）、千切屋（紬織・京染）、千總（京友禪）、矢代仁（紬織・京染）—が、それぞれ、毎年 1 月、その年のテーマに沿った特別企画品を図案づくりから始め、数度にわたる試作・検討を重ね、秋に完成させます。

試作・検討にあたっては、同人 8 社が一堂に集まり、高島屋の呉服担当者とともに、作品の完成度をより高めるために、同じテーブルで率直に意見を交わします。異なる分野での最高の技術を持つ同人が、互いの技術の継承のために、そして呉服の将来の発展のために一堂に会することも、上品會の大きな特徴です。染織五芸の最高峰の技に、いま求められているものという視点を盛り込んだ新しさのある作品が、振袖、訪問着、着尺、紬、絵羽コート、なごや帯、袋帯などの多彩なアイテムで毎年生み出されます。

■同人について

株
式
會
社

岩田

川島織物



秋

龍村美術織物

千切屋株式會社

場



千總

矢代仁

・秋 場 (あきば)

明治 24 年、初代秋場三松が結城紬および豊田紬（石下織物）の専門卸業を開業したことに始まる。取扱商品は本場結城紬・本場大島紬・越後上布・豊田紬・宮古上布など、緻密な手仕事から生まれる紬が中心である。

・岩 田 (いわた)

大正 10 年、先代岩田藤治郎が京都市上京区にて帯地の卸商として創業。帯一筋に独創的な商品づくりをすすめる、絢爛豪華な逸品もの、格調高い能衣裳・唐織袋帯・刺しゅうを使った袋帯や、新感覚おしゃれ帯など、岩田の優秀なデザインと技術による作品を世に送り、帯の岩田としての名声は高い。

・川 島 (かわしま)

天保 14 年（1843）初代川島甚兵衛が創業。川島は西陣の伝統である帯地を中心に、美術工芸織物まで広く製造販売を手掛けている。また原糸から製品まで撚糸・染織・製織・仕上げの全行程を一貫して、完全な品質管理のもとに生産している。とくにデザインの考案開発にはげみ、織物地合いの工夫につとめるなど美術織物の老舗として名高い。

・大羊居 (たいようきょ)

江戸染織の名門。大彦の創業者、野口彦兵衛の長男野口功造が大正 15 年に工房を構え、大羊居を名乗ったのに始まり、その作風は古典を知ってとらわれず、新しさを求めておぼれず、大胆にして雄大な意匠構成と独特の色彩感覚によって、華麗ともいえる染織美を創造。近年伊東から東京へ工房を移し、この伝統を受け継いで作品の創造に励んでいる。

・龍 村 (たつむら)

明治 27 年、古代裂・正倉院宝物裂などの研究復元に稀有の才能を発揮し、その業績がたたえられた。また帯の龍村として織物の芸術性を高めた初代龍村平蔵は上品會の発会に深く関わる。格調高い「上品會素旨」は翁の手になるもの。伝統の錦帯のほか広く装飾用美術織物を手掛け、新宮殿の綴織タペストリーや、薬師寺西塔の錦幡を制作するなど、その業績は高く評価されている。

・千切屋 (ちきりや)

店祖長野与兵衛忠雅が、小袖・被衣を商った、総本家膝屋（そうほんけちきりや）から別家を許されたのが享保 10 年（1725）。この（ちきり）は織機の部品の一つで、織りあがる布をひきしめる際に使われる道具の一部。本家から 300 年続いたこの屋号を明治に千切屋とした。その明治に新柄陳列会を開き、いまでも作家の発掘・育成につとめるなどの進取の気風に富む社風は染織界に新風を吹き込んでいる。

・千 總 (ちそう)

千總は弘治元年（1555 年）、初代千切屋与三右衛門が三条烏丸に法衣商を営んだことに始る。千總は、御所や宮家の御用をつとめる一方、明治期以降は、意匠、技法の両面で友禅染め発展に尽力している。千總の友禅の美しさは、格調高い繊細な色柄にある。伝統とは守ることではなく創ることだとする代々の経営思想のもと、素材の白生地・図案・下絵・色出し・友禅染にいたる一貫生産により、友禅の美を守っている。

・矢代仁 (やしるに)

遠く享保 5 年（1720）に発祥した名家。西陣織着尺白亀綾縮緬（宮中・将軍の絹肌着）ビロードを扱ったのが始まり。「日々新なり」の家訓のもと、新しい美を求めて西陣の美を伝え、創ってきた 300 年の歴史の中で、生糸から製品にいたる一貫工程で商品を制作するなど、京都では数少ないメーカー問屋として発展。現在では織物に加え、染のきものも数多く制作している。